令和５年度　第１回豊田市生涯学習審議会　会議録

■日時　　令和５年５月３０日（火）　午後１時３０分～午後３時３０分
■場所　　市役所南庁舎７階　南７３委員会室
■出席者　[豊田市生涯学習審議会委員]（敬称略　５０音順）
江里口あけみ　（桝塚西町ささえ愛隊　副代表）
大岩由治　（とよたシニアアカデミー　事務局長）
鬼木利瑛　（株式会社 eight　代表取締役）
小宮山利恵子　（株式会社リクルートスタディサプリ教育 AI 研究所　所長）【副会長】
近藤　悟　（地域学校共働本部推進アドバイザー）
坂元玲介　（とよた多世代参加支援プロジェクト　会長）
戸田友介　（株式会社　M-easy　代表取締役）
古川由香　（市民公募）
古澤三秀　（市民公募）
牧野篤　（東京大学大学院教育学研究科　教授）【会長】
三ツ石靖子　（豊田市市文化振興財団 交流館課　主任指導主事）

■事務局　八木健次（生涯活躍部　部長）
加藤達志（生涯活躍部　副部長）
小澤真里（市民活躍支援課　課長）
和出広樹（市民活躍支援課　副課長）
堀田真悟（市民活躍支援課　担当長）
竹内祐衣（市民活躍支援課　主査）

次第

１　開会・あいさつ

２　議事
「人生１００年時代における学びのあり方と方策」
（１）審議会の概要と令和５年度スケジュール　【資料１】
（２）人生１００年時代の学びのあり方と方策（中間とりまとめ）【資料２】
（３）委員からの話題提供
（４）意見交換　①学習機会と場の提供　②活躍機会の創出と地域活性化

３　閉会

１　あいさつ

八木生涯活躍部長

生涯活躍部では市民の皆様が元気に活躍できる環境作り、機会作りということを強く意識して各種業務に取り組んでいる。委員の皆様方から多くのご意見を頂戴して、生涯学習施策を推進していきたい。

A 委員

東京大学で航空宇宙を専門にしている名誉教授が「地球はあと５０億年後くらいには、膨張する太陽に呑まれてなくなり、２，３年のうちに天体衝突が起きて人類が絶滅する可能性もないことはない。確実なことは、１００年後の私たちの子孫は今よりもっと過酷な状況のもとで生きることになる」と言っていた。

また、東海地方も梅雨入りしたが、5 月に梅雨入りするのは異常気象の影響でないか。過去にも社会の転換期がいろいろあったが、人間が作り出した構造的な転換期が基本になっており、大きなものはそこに自然災害等が関わってきている。例えば、農業社会から工業社会に移るときは、ペストが流行ってヨーロッパの人口が 3 分の 2 になった。軽工業社会から重工業社会に移る数百年前にはスペイン風邪が流行って 2500 万人が亡くなった。工業社会からポスト工業社会に移る時期に気候変動と新型コロナウイルス感染症があるのではないか、といわれる。

生涯学習という概念は、日本が最初に提唱した面がある。1980 年代半ばに臨時教育審議会で、工業社会に対応した学校教育システムにほころびが見えてきたということで、新しい社会として一生涯学び続けられる社会が提唱された。

その後、経済的な停滞期に入ってなかなか社会の構造変革ができなかったが、今待ったなしの状態になってきたというのが私の実感。社会全体が生涯に学び続ける、学び直しをし続けながら新しい価値を作り出していかないと、社会が持たなくなってきているのではと指摘される時代に入った。

その意味でこの審議会では、新しい豊田市を考えていくことに結びつけながら、活発なご議論をお願いしたい。今月から始まる第 9 次総合計画審議会にも反映できるような形で議論を進められればと思う。

２　議事

（１）審議会の概要と令和５年度スケジュール　【資料１】

事務局から説明　→　意見なし

（２）人生１００年時代の学びのあり方と方策（中間とりまとめ）【資料２】

事務局から説明　→　意見なし

（３）委員からの話題提供

B 委員から説明

（４）意見交換　※要約

A 委員

B 委員から紹介のあった「若者よ！田舎をめざそうプロジェクト」は、当時名古屋大学に勤務していた私も関わっていたプロジェクトであり、学生時代の B 委員と一緒に進めたものである。そうしたこともあり、少し補足する。

市町村合併から 3 年経ったところで鈴木前市長から「自分は農山村にとても想いがあってやってきたけれども、本当に豊田市としてよかったのだろうか」ということを率直に吐露され、何とかならないかと相談されたので、1 年間かけて合併町村に入れてもらって調査をした。学生を連れて毎回 3 週間ずつぐらい泊まり込みで話を聞き続けた。すると、当時顔役の方が、「自分たちは 1 度ふるさとを捨てている」と話された。高度経済成長期に農山村が疲弊を始め、自分たちが高校に進学するかしないかというときに、親から次のような話をされたという。「国の政策が変わり食えなくなっていく中、農林業を継いで 1 年に 1 回の収入にかけて博打を打つのか。それとも、サラリーマンになって家電品や車が買えて家を直すことができるような生活で、一度ハマったら足抜けできなくなる麻薬を食らうか、このどちらかしかない。ふるさとの状況を考えると、残念だけれども麻薬を取れとしか言えないから進学しなさい」と言われたと。

そのときどんな気持ちだったのですかと聞いたら、「当時サラリーマンになることが良いことであり出世だという感覚もあったので嬉しかった。その後は、下宿をして高校進学し、大学進学後、就職して定年を迎えた。定年後はまだ親がい

たし、田畑もあるため地元に戻った。しかしながら、自分のこどもや孫は都市で育っており、彼らが後を継ぐという感覚はない。だから、この村はもうおしまいにするからほっといてくれ」とのことであった。他の方にも聞き取りをするなかで行く先々で「ほっといてくれ。もうおしまいなんだ」と言われ続けて、私としてもどうしようかと悩んだ。

反面で、とあるお世話になった民家で、嫁いできた若いお母さんの集まりに呼んでもらったところ、お嫁さんたちは、「ここの暮らしがとても気に入っている。自分たちは、農薬を使わない食品を作っていて、売ったり食べたりして楽しい生活をつくっている。旦那と離婚したら旦那に出ていってもらう」と笑いながら話していた。そのとき、この落差は何なんだろうと思った。

鈴木前市長がおっしゃったように農林業では食えないと５０年も前から分かっているが、もう少し違う事業の立て方はないかと考えた。さきほど B 委員から紹介いただいたように、小商いを重ねつつ、文化的な新しいライフスタイルを作っていくっていう可能性はないだろうかと。B 委員には当時苦しい思いをさせたが、途中から方向を変えて、お金儲けは後からにして、とにかく地に足をつけた形で生活をしようという覚悟を決めてもらえて、今に至るようないろんな事業をしてくれている。このことにとても感謝している。

また、当時、旭支所の職員も懸命に支えて下さった。支所が集落カルテをつくり、各家庭がどういう状況でどんなときにどんな支援が必要かといったことを全部洗い出した。このカルテとプロジェクトが重なる中で、住民の方々がとても快く受け入れてくださった。若者たちを支えてくれて、若者たちは食えないのに食ってきたようなところがあって、そういう形の中で新しい農山村のあり方が見えてきたのではないか。ここ数年いろんな事業が重なりはじめて、新しい事業も起こってきて、移住者も増えてきている。

実は、B 委員のパートナーは私の直接の教え子でもある。移住後 4 人もこどもを授かっている。なんでこんなにいっぱいこどもがいるのか聞いたら、「ここで生活をしていると体がこどもを欲する感じがする。こどもはみんなで見てくれるので全然心配してない」と言われ、考えさせられた。都市で生活をしていると頭で考えてしまい、赤ちゃんができたら子育てどうしようかと考えてしまうかもしれない。少子化問題を考えるときに大きな一つのヒントになるのではないか。新しいまちのあり方を彼ら自身が作ってきてくれたのだが、そこには彼ら

自身の新しい生き方がかかわっている。

それから、敷島自治区でもう一つ動いているものとして、「自給家族」の取組ある。一俵 3 万円で消費者が買うことによって自治区の家族になる仕組み。ともに米を作り、食べ、交流する家族という関係を作っていく中で、農山村が保全され、それが自然環境保護にもつながるという取り組みだ。関係人口の創出につながり、農水省がやっている農村 RMOにも採用され、全国的に注目されている。人生 100 年時代を生きていくこと、さらにはそのこどもたちが新しい社会を生きるといったことの一つの方向性を示している取組だと思う。

B 委員

小さな取組を重ねているという話をしたが、実は小さな取組を評価するのは難しい。審議会での議論が企画化され、あるいは、総合計画に反映されたときにも学びは評価が難しいジャンルだと思う。小さな取組は、合理主義的に評価しようと思うと途端にあまり評価されないという面がある。新しい評価のあり方も作っていかないといけない。

A 委員

評価でよく言われるのは PDCA サイクルで、目標を決めて達成度を測る形が一般化しているが、まちづくり、学び、教育に当てはめると駄目になってしまうケースが経験上ある。B 委員の会社ではどのように評価しているのか。

B 委員

企業の事業として私的に回している分には評価よりもみんなが幸せそうなら良いという感じでやっている。

C 委員

今回の肩書とは別であるが、とよた科学体験館でプラネタリウムなどサイエンスに携わっていたことがある。欧米でも科学は教育的なことだけが目的ではなくて、例えば、絵画や音楽鑑賞と同じように文化を楽しむというのと同じレベルで科学を楽しもうという考え方。事業を企画するときに、最初に趣旨や目的から考えると本当に面白いだろうかと行き詰まることがある。数値的なものだけ

ではなくて、自分が面白いと思ってやったことの方が共感を得ることがある。

A 委員

どうしてもエビデンス（根拠）を数字化して出す議論になってしまって、多くのところがつまずいてしまっているのではないか。文化、芸術、教育等において、企画に対してどれくらい参加したかが評価対象になることが往々にしてある。

D 委員

経済成長の指標としてＧＤＰ（国内総生産／グロスドメスティックプロダクト）があるが、最近は、ＧＤＷ（(国内総充実度／グロスドメスティックウェルビーイング）という評価手法が出てきている。一人一人がよりよく生きるという概念で B 委員の自分ごと化という話とも密接に関係すると思う。ＧＤＷで何をＫＰＩ（重要業績評価指標／キーパフォーマンスインディケイト）にするかというと、経済的な要因だけではなく、人的・社会的・文化的な資本の要因を基礎にして換算をしている。エビデンスをベースとした指標では、全て数字になってしまうが、ＧDWは定性的なものが大きい。例えば、一人一人が幸せに暮らしている、生活に満足感が高いといったもの。

A 委員

GNＨ（国民総幸福量／グロスナショナルハピネス）もある。荒川区ではこれに準じて GAH （荒川区民幸福度）という独自の指標を設定している。こうした価値観に共感する自治体で幸せリーグ（住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合）を結成している。ただ、これも指標化して点数化する議論になっている。それで本当にハピネスが図られているのか。そこから外れたハピネスは、政策的には対象にならないのかという批判が起こったりすることがある。

E 委員

とよた多世代参加支援プロジェクトは市からの負担金等で運営しているがＫＰＩの設定と達成には苦労している。数字が大事だが、数字に追われると辛い部分もある。また、任意団体なので、市に関連する事業に加えて、自分たちがやり

たいこともやっていきたい部分もある。市が設定するＫＰＩと別の指標を自分たちでも考えているが、現在も勉強中である。ＫＰＩをひたすら追い求めるだけでは、Ｂ委員が言われたように楽しさが失われてしまう懸念もあると感じた。

A 委員

国や自治体では、ＫＰＩに基づいて政策のあり方や方向性を決め評価している。ＧＤＷ は幸福感であるため主観的な視点であり、個人が幸福に感じられるような状態になるということが基本である。そのため、個人の感じ方とそれを支える環境のあり方もウェルビーイングになるような関係が望ましい。ウェルビーイングとは、よりよく生きるということ。

例えば、ＧＤＰのような経済的なものは数値で計ることができるためわかりやすいが、ウェルビーイングのような関係性のあり方や繋がりといった定性的なものは数値化しにくい。これは、質で考えようという流れだが、評価になると結局、質を量化することも起きており、こうなるとよくわからないことにもなってくる。

F 委員

先ほどの話にでてきた「体が欲している」「いてくれるだけで嬉しい」のような言葉がすごく力強いなと思う。言葉の力を生かして、「面白い」や「挑戦したい」など日々の言葉をＡＩで見える化できるといいかもしれない。

また、日本人は多くの言葉の表現があるので、日本人らしい指標として言葉や色などの表現力を使った指標を編み出してもいいのではないかと思った。

G 委員

話題提供の中で、小さな営みに複数取り組んでいるという話に感心した。地域学校共働本部推進アドバイザーを務めるなかで、地域も学校もＷｉｎ－Ｗｉｎの関係でなければいけないという対等な形で進めている。

市が掲げている「ミライのフツーを目指そう」という言葉が好きで、現在の地域学校協働本部の活動が何年か後に普通の活動になればいいなと思って活動している。その意味では、今現在の評価ではなく、将来、今の活動が評価されていればいいのではないという見方もできるのではないか。

また、豊田市は、都市と山村が共生しており、地域ごとにバラエティーに富んだ特徴があるため、地域学校共働本部の取組においても地域の特色を生かしていくという考え方で推進している。仕事などを通じて初めて知る市内の活動も多くあるため、そうした活動を色々な人に知ってもらうにはどうしたらいいかと思っている。広報誌はじめ情報は出ているが、関心のない方へのアプローチは難しい。地域学校共働本部の活動でもボランティアとして参加してくれる人がいないと成り立たないが、ボランティアの多くがあらゆるところで活動している方であり、なかなか広がらないという悩みもある。

何かをやろうとすると色々と考えてしまい進まないことがあるが、そもそも活動しないとその評価も成り立たないので、今起きている活動をもっと広げられるように、参画できるように、どういう形で皆さんに周知していったらいいのかというのは悩ましい問題。

A 委員

将来どうするかを考えるときに、何か目的を決めて達成していくやり方と、譲れないものを置いておきつつ、みんなでいろんな形を作り上げていく形にしておくやり方とがある。例えば、目的を達成するために計画を立ててやっていくという作り方、あるいは、これからどういう社会になるかよくわからない中で、あり方そのものを関わってくる人たちが、その都度方向性を決めつつ、作り上げていくという捉え方もある。

C 委員

シニアインサイト（人間の本能的社会的欲求に基づく行動や心理核心など）について調べていると、シニアになると他の世代よりも共感欲求が強いようだ。自分も含めて人間誰しも自己顕示欲があって自分が認められたいという形で仕事を頑張っていたり、モチベーションがあったりする。定年に近づいてくると、他者貢献をしたい、社会や組織に貢献したいという考え方や価値観が少しずつ湧いてきて、共感をしたい、されたいというような感じになるのかなと思う。シニアアカデミー事業を今後考えていく視点としては、そのことを念頭において企画をしていきたいと考えている。

A 委員

次の世代に関わりたくなり、次の世代を育成したくなってくることを本性として持っている考え方を専門用語でジェネラティビティという。

また、最近の研究では、義務教育段階で、地域で手厚い関わりを持ったこどもたちは４０歳超えてから社会貢献意識が強まるという傾向が分かってきた。特に、ボランティア活動など経験のあるこどもたちは、リーダー性と互恵性が強まるということも言われ始めていて、恩送りが行われていくようになる。

H 委員

学びの評価というのはそれぞれの受け取り方が違うため、いろんなプロジェクトをやっても当然温度差がある。参加したことで、どれだけ元気になったか、どれだけやる気になったかというのが一つの指標かなと思う。学びが日常生活の中でモチベーションにつながり、プラスになったという評価がよい。

I 委員

交流館で実施する中学生のボランティア活動の成果は、こどもたちが成人式を迎えたとき、就職をしたとき、こどもができたとき、歳を重ねた頃に思い出したときなど、後になってからだと思う。将来、子どもたちがどうなっているかを見たくても、実は職員はみることができないことがほとんど。そのため、評価についてもどうなったら正解かというのはその時やっているときは全く見えないし、逆に言うと評価する必要もないかなと思うところもある。今の時点での狙いや目標が、20 年後は事態が変わって全然値しないことかもしれない。そうすると現場としては、今のこどもたちのために提供しておきたい、教えておきたいという思いで止まってしまうのかなという気がする。評価ができるタイミングは先のことなので、評価の視点を決めること自体が難しいことなのかもしれない。

また、豊田市は２８か所交流館を設置しているが、どういった学びを身近な地域の人に提供していけばいいのか模索しているのが正直なところ。生涯学び続けることや学び直しが大事だと働きかけをしても何を学べばいいのかわからない市民もいるかもしれない。

A 委員

資料 2「人生１００年時代の学びのあり方と方策（中間とりまとめ）」の４（１）基本的な考え方において、全世代が活躍する社会、挑戦を支えて失敗に寛容な社会について明記されている。このことは、数値目標を立ててどうとかではなく、人としてどうあるのかといったことを基本に考えられているのだと思う。一つは、退職があってそこからは余生ですということではなくて、やはり人生 100 年活躍し、人として尊厳を保ちながら、自己決定して生きていけるような社会にしましょうという考え方。もう一つは、今こどもたちが、失敗しちゃいけない、白黒分けなきゃいけないみたいになっているが、失敗を重ねつつ、自分の人生をつくっていく力をちゃんと持って欲しいということが反映された考え方になっている。

学ぶということも、知識を蓄えていくとか学校で勉強するということだけではなく、B 委員に話していただいたように、自分たちで生活をつくっていく過程で、地域のことを学び、お互いに学び合い、いろんな提案をし合いながら新しい事業を作っていく、やりながらさらにそれを変えていく、ということをしながら今の状態があるということ。そうしたこと全て含めて学びであるということになるのだと思う。それらが、生涯学習の意義であり、明記されているとおり、生涯学習はまちづくりの根底に続く概念であって、学び合うということが重要なのだということにつながるのだと思う。これからの社会のあり方を踏まえて、一人一人の学び直しにおいて、技術を身に着けなおすリスキリングや固定化したものをほぐすアンラーンといったことが必要であると思う。

F 委員

リカレント教育やリスキリングを議論するうえで、学びについて周囲がどうとらえているか気になったので聞いてみた。ある方は、大学受験を失敗して福祉分野を諦めたが、こどもの不登校の経験も経て、今になって手話を始めたとのことであった。また、中学生の私のこどもは、友達関係に悩んだから心理学を学んでみたいと言っていた。過去の自分へリベンジがしたい、問題に直面した、困っている人を助けたい、将来のために資格をとりたい、など学びを始めるにはきっかけがあるのだと思った。

そこで、学びについて、①現在の自分のため、②現在の誰かのため、③将来の自分のため、④将来の誰かのためという観点で昨夜アンケートを実施した。現時

点で約 80 名の方に回答してもらった。回答者の属性として、年齢層は 30 代後半から 50 代後半くらいの団塊ジュニア世代から少し若い人たちが多い。

アンケートの結果、自己理解ができている人は、今現在に着目し、誰かのために学びたいという方が多かった。一方で、自己理解が進んでない人は、将来の自分のために学びたいと思っている傾向があった。自分を理解して、自分が学ぶことで現在の自分の成長とか将来の誰かのためになるから学びたいと思った方が、生きがいとか幸福感にもつながると感じた。

また、同じ目標や目的を持つ人たちと一緒に体験、越境し学びたいと思っている人が多いことがわかった。今後、学びに関する企画を立てる際は、自己理解、体験、越境、コミュニティを意識していきたいと思った。

A 委員

アンケートは大変参考になった。1 人で学ぶよりはみんなで同じ方向を向き、貢献を通して、自分に返ってくるような関係がとても大事じゃないかという話であった。知識だけを学ぶということよりは、将来に向けてあるいは関係性の中でどう自分を作り上げていくのかといったことに関わるような学びをしたいと思っていらっしゃる方が多いのだろうと感じた。

J 委員

高齢者クラブの役員を務めていたときになかなか前進しない経験を経て、現在は、クラブを解散して別の地域団体をつくって活動している。地域のみんなで誰とでも一緒に活動できる会が欲しいということがきっかけで、多世代で一緒に遊べるサロンを運営している。ある意味では、実は自分の居場所が欲しくて始めたようなところもある。先日、サロンによく来る方が病気して救急車で運ばれたが、1 週間ぐらいしたら帰ってきてくれた。「おかえり」と言ったら「もうここに来ることが楽しい、それを目的に頑張って戻ってきた」って言われたので、私としてはもうそれだけで十分満たされている。

A 委員

J 委員の話、それが一番基盤だと思う。やはり、自分にちゃんと居場所があり、関係性につながっているといったことがとても大事。

K 委員

こどもたちの背中を押しているのは、親だったりするケースも多いのかなと思う。自分の子育てを重ねたときに、私自身も自分軸で面白そうなことを薦めていた。それは、私がこどものころ経験したことが大きく影響しているのかもしれないと思った。

幸せ度を何で測るか考えたときに、サーモグラフィーで体温が測れるように、AI で脈拍や脳波とかも測れるかもしれないと思った。デジタル技術を活用した評価手法が、豊田市だからこそできるものがあるかもしれないと思った。数字で計る必要があるならば、そういうものを開発していくのも面白いのではないか。こどもたちも興味を持って、「この機械すごい」となると、興味関心に繋がっていくのかなと思った。

B 委員の話を聞いて、つくラッセルのような開かれた場所に行ってみよう思ったときに既存のコミュニティがあるだろうなと思ったりすると少し足かせになってしまう人もいるかもしれないと感じた。

A 委員

学校で教えたり、こどもに関わったりしたことは、そこに関わった大人が見届けられないぐらいのときに形になって出てくることもあると思う。その意味では、教育や学びは年度単位とか短期間で見ていくことはしない方がいい。人生 100 年、国家１００年の計とか言うが、長い目できっちり育成することも大事なのではないかと思う。そういう観点が最近この社会の中から抜けてしまっているっていう面もあるのではないか。自分の人生をみんなが支え合いながら生きていけるような形にしていくこともとても大事じゃないかと皆さんの話を聞いて思った。

これまでは、自己実現や個人の幸せを考えるときに、アメリカの心理学者マズローの欲求５段階説を活用することが多かった。しかし、最近、色々な社会実践者の方々と議論するなかで、次のようなことを言い始めている。いい関係の中にうまく個人が当てはまると、実は周りから色々な能力を引き出されていき、そして、自分がそこで役に立っていることが嬉しくなり、もっと頑張ってしまうということ。これをジグソーパズルに倣ってジグソーパズルモデルと呼んでいる。

このことは、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）が２０３０年を見据えたラーニングコンパス（学びの羅針盤）で提示している考え方にも通ずる。このなかでは、学習プロセスとして、学習者が状況に適応し、振り返り、必要な行動を起こし、継続して自分の考えを改善していく力として、予測・見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り（Reflection）のＡＡＲサイクルの獲得が提唱されている。Anticipation は、少し聞きなれない英語かもしれないが、何か楽しいことをやっているとワクワクしちゃう感覚。そのうちに体が動き始めて Action が起こって Reflection するというサイクル。

学校教育にこのサイクルを当てはめていくと、きっちり評価しましょうという議論が出てきてしまうかもしれない。しかしながら、社会教育や社会活動はあまり深刻に評価しなくても、上手くいけばもっと次へ行くし、うまくいかなければやり方を変える、振り返りながら次へ行こうということになる。また、1 人ではなくみんながそういう状態になっていくことで、お互いに影響を受け合いながら、与えあいながら、巻き込み型で動いているのだろうと思う。

そうすると、実は周りの人たちの関係性の中に自分が当てはまる、面白いことが起こり始めて次のステップに行こうとする。周囲のみんなも一緒に動き始めるので、みんなが影響を与え合いつつ、いい関係ができてくるのではないか。やはり、人のあり方は、関係性の中にうまくはめ込まれていくと次から次へと自分の力が発揮できて、思わぬ力が生まれてきてしまうようなことが起こるのではないか。

D 委員

1960 年からアメリカで「ペリー就学前プロジェクト」という研究がずっと行われている。就学前に非認知能力を育てられたこどもたちが、大人になってから 40 代以降幸せで、経済的な安定に繋がっているという実証実験。非認知能力とは、想像力、コミュニケーション力、共感性など数値で測れないもの。

それと、日々学んでいるはずなのに、何か資格を取らなければいけないとか、何かできるようにならなければいけないとか、私も含めて学びという単語へのハードルはすごく高いのだろうなと感じた。これまでの学校教育の影響も強いと思うが、何か形にならなきゃいけないという思いが強いのではないかと思った。

そのハードルを下げてあげると、リカレントとか生涯学習に繋がってくるのかもしれない。学びというと皆さん来ないかもしれないけど、おいしい日本酒を飲み比べてみませんかというような初めのステップでもいいのかなと思った。

A 委員

「ペリー就学前プロジェクト」は、とても有名な実験で、簡単に言えば人間関係の中で育てられていく自己肯定感をしっかりつけておくと、将来、自らやろうという気持ちに繋がるということがわかってきているということ。その他の研究では、貧困地域の学力の低い子たちに対して、金銭的な支援による教育を施すのではなくて、良い人間関係を作って対話的な関係を続けていくと途中からその子たちの学力が上がり始めるといったことが分かってきている。良い関係を作ることもこれからの学びの基本になる。いい関係のもと、お酒飲みましょうと言われるとやっぱり行きたくなるといったことと同じではないか。

以上